

り、源頭の雰囲気となる。細いナメ床はなおも続くが、もう小さな溝状にすぎず、水もほとんどなくなったところで引き返す。

この沢の源頭部は、たくさんのゴミが目についた。自衛隊の廃棄物である。ジュースの缶からウイスキーのびんをはじめとして、古タイヤ、オイルの缶、ガスボンベ、長靴まで、種々雑多のゴミが散乱していた。演習地内における自衛隊員のマナーはなっていない。

[タイム] 出合(5:45)→二俣(6:35)→遡行終了(6:55)

一ノ沢(仮称)右俣

1987年8月15日

7:20遡行開始。左俣と同じくナメが続くが、小滝が出てくるところだけ変化がある。それ以外なんということもないまま源頭の二俣となり、右沢に入る。

すぐ源頭となり、7:40遡行終了。

(記)

[タイム] 二俣(7:20)→遡行終了(7:40)

二ノ沢(仮称)

1987年8月15日

8:05下降開始。すぐ湿地状になり、そこを5分ほど下るとはっきりした沢の形をとるようになる。そしてすぐナメとなる。

支沢を次々に合わせ、次第に水量も多くなり、沢幅も広がってくる。やがてゴルジュとなる。ここに滝がかかる。最初の3mは、シャワーでクライミングダウン。そのあと7mの滝。この滝は下れず、ザイルを出して懸垂下降する。

滝を下った所で小休止する。この下はもう平凡な河原で、5分も歩くと本流との出合であった。

[タイム] 下降開始(8:05)→下降終了(9:00)

